2015 年 9 月 9 日　14:30-17:00

IETM/ON-PAM 共同セッション「アジアのコンテンポラリーとは？」

における ON-PAM　ラウンドテーブル

会場：　Asian Culture Complex Archive & Research 中庭

司会・進行：ロー・キーホン（West Kowloon Cultural District《西九文化区・香港》, Head of Artistic Development (Theatre))

IETMとON-PAM共同セッションでは、テーマ「アジアのコンテンポラリーとは？」について、哲学的、抽象的な話ではなく、具体的な方法論的考察で考えてみたいという司会による導入に続き、以下 3 つの質問が提示された。これをもとに約 10 組、各テーブル１０人程度のラウンドテーブルでグループディスカッションが行われた。グループはその場で自発的に多様なメンバーで組まれたが、その中で ON-PAM については、IETM と協議の結果（※註１）ON-PAM のラウンドテーブルを作り、会員による日本語での議論をもとに、ON-PAM としての見解を発信する、ということになった。

「Working Group: What is contemporary in Asia?」とのタイトルで出された３つの質問とは以下の通り。

①What are some of the key research areas you are keen to work on in the next 2-3 years? And why these areas?
あなたがこれから2～3年の間で特に重点をおいてリサーチしたい地域はどこですか、そしてそれはなぜですか？

②What are some of the practical conditions you can identify or put on the table to facilitate this research for each other?

その調査を共に進めるために必要だとあなたが指摘できる、あるいは議題に上げられる実際的条件にはどんなものがありますか？

③How would you propose to make this research available for other colleagues? Look at something that can be practically implemented based on your current and projected access to resources. It may require a radical shift from the current systems.
どうやってそのリサーチを仲間と共有したいと思いますか？ リソースに対してあなたが現在持っている、あるいは持つであろうアクセスのあり方に基づいて、現実的に導入可能な方法を提案してください。それが現行のシステムからのラディカルな移行を要求するものであってもかまいません。

これら質問に対して、私達が今後、仕事をしていく上で、アジアの同時代性について、ある地域にフォーカスをあててリサーチをする、そのためには何が必要かを考えアクションプランを考えるもの、と解釈する。さらに、これまで経済も文化も欧州中心だったが、それがアジアに移りつつある中で、光州で実施されたこのプログラムを、どのように私達がひきついでいくか、本セッション直前に聴いたソンヒ・キム（アジア芸術劇場ディレクター）の話を受け日本でどうやっていくかを考えるべきという意見も出た。

まず①については、丸岡が自身の関わる事業である TPAM においては東南アジア、ただしマレーシアやインドネシアのようにすでにコンタクトがありアクセスしやすい地域と、ミャンマーやカンボジアなどアクセスの無い地域については、アーティスト本位よりもまず国単位で考えてしまうという問題が提起された。一方相馬は、やはり自身が関わる芸術公社視点から発言があった。「当公社は一貫して、隣国でありまた自分の身体感覚として共有できるもののある東アジアに重点を置いている。東アジアは、日本自身を見つめなおすための鏡でもあり得る。また、今後アジアでリサーチを展開するにあたっては、「他者の現実」へどうアクセスするか、そのリサーチの方法自体を発明していきたい。プラットフォームづくりや作品のコプロデュースよりも、観客の体験をどう共有するかに関心がある」という主旨の発言があった。また、今、政策としての芸術関係者によるアジアへのリサーチが行われているが、えてして相手先がいつも同じになってしまうという指摘もなされた。
ここで、ここは ON-PAM テーブルなのだから、各人が関わる個別の事業の事ではなく、ON-PAM として何をどう展開するかを考えるべきという指摘がなされ、ON-PAM の組織自体が、その特性通り個人のネットワークとしてどう発展し、アジアにおい

て何をどう共有すべきか、という議論へシフトする。第一ステップが光州だとして、その次は何を目指すのか。

なぜアジアなのかについては、アジアのネットワークが顕在化していない、近いという地理的条件にもかかわらず、欧州などに比べるとネットワークが少ない。自分たちのエリアにこそ自覚的にネットワークを作っていくべしという意見がでる。

結果的には②と③を合わせての議論が展開する。特に共有の仕方について、網羅的に具体的な蓄積・視覚化・アーカイブ化を重要視し、これまで歴史を作り圧倒的な蓄積を実現させ、システムとして確立させてきた欧州に対し、アジアとして持続可能な独自のモデルを示すために、公的機関ではなく民間 NPO もしくはネットワークとして持続可能な方法を探るべき、そうして未来に対して参照先を残していく、という意見が一つ。もう一つは、こういったプラットフォームに参加し、同時代作品を観ること、人と出会い議論することで得たものを、ネットワークのメンバーひとりひとりが其々の仕事に活かすことが蓄積である、という意見。つまり、光州でいろいろな作品を観たことで残るものはあり、現在の体制が崩れたとしてもその経験は残るし、そこでできた仕事の関係は続くはずというもの。いずれも、公的な機関（institution）ではなく（個人の）ネットワークとして蓄積・共有すべしという点では共通していた。

ネットワークにおけるリサーチのあり方を考えるとき、ON-PAM の中で共有されるものとはなにか。

ずっと課題として議論されているのが、ON-PAM をどういうタイプのネットワークにするのが効果的か、という点。これまで参照していたのは IETM のようにメンバーを増やし、どんどん拡大していくタイプだったが、それをマネージするためには結果的に組織としてしっかりするしかなくて、頭打ちという印象があるという意見も出た。このネットワークをスタートさせた当初のように、続けたいと思う人がすぐに動けるようなネットワークの軽さをキープすることも、ひとつのアイディアではないか。その意味で、海外とのネットワークもどんどん広げてメンバーを増やすことに主眼を置くのではなく、このくらいの、つまり 10 人手程度の小さな規模でプラットフォームに参加し、地道にミーティングを開き、考えをシェアしていくタイプがよいのではないか、そういう機会を必要に応じ少しずつ増やしていくのはどうか、など。

共有の仕方について、ON-PAM でコンタクトリストを共有し、会員が関わってきた上演の記録を ON-PAM で参照できるようにするという案もでたものの、それ自体が一つの大きなプロジェクトとなり、ファンディング、人手、個人情報管理の面で実現

可能性が低い。

それよりもアウエーで会議を実施し、経験を積み、会議の採録をして共有し、つまり一個一個のサブネットワークとして、議論やリサーチの内容を記録していくことはできるはず。ON-PAM がひとつの運動体として、こういうミーティングに参加し、海外の地域のネットワークともシェアできる形で国際会議を開き、長期的スパンで考え、レポート・記録を残していく。海外で実施する ON-PAM ミーティングの議論の内容は会員以外とも共有する。

ON-PAM は日本のネットワークなのかどうか、という質問が出る。日本における文化政策に対するアドボカシーを考えている以上、他国の人が入って議論するのは難しいだろう。オープンではあるが、ある程度ローカルでもある。もう一つはサブネットワークを作っていくことで、それは国際会議に参加して作っていく。台湾の人とコラボレーションをしたり、アジアもしくはインターナショナルな課題を扱うこともできる。しかしながら、関わりたい人は誰でも、という姿勢は重要であり確保すべき。形骸化させないために、維持が目的となることなく、常に動き続け、状況に即したものに変化していくことが重要という指摘がなされる。モビリティを確保しつつ、海外の大きな会議へ複数のメンバーと参加することで、協働できる相手と出会う可能性が広がるという補足も。

さらに、アジアの同時代的作品には多くのおもしろいものがあるということを、日本の多くのプロデューサーは知らない。そして観客はそのことをもっと知らず、アジアの同時代作品を上演してもお客さんがなかなか入らないし、プロデューサーもやりたがらないという悪循環の存在が指摘される。そのためにも ON-PAM のミーティングでは、アジアで、今、何が起きていて、どういう課題に直面しているか、などについて共有・議論し、その内容をウェブや、日本でのミーティングを通してシェアしていく。プロデューサーや観客への働きかけの場としての ON-PAM へと視点がシフトする。まさに、この光州で観ているのは、アジアの同時代作品には面白いものがないなどとは言わせないというプログラムであり、このことをシェアすべきである。

2 日目のミーティング「作品制作に関する韓国の新たな試み」と 3 日目「日韓クリエイティヴ・プロデューサーの新たな姿。必要なスキルとキャリア・プラン」こそがまさにリサーチである。今回 ON-PAM ミーティングでありながら、なぜ日韓に限定したかについては、韓国で行われるからということ、さらに参加するプロデューサーとアーティストはアジア芸術劇場の視点から選んでもらったことについて言及があった。

以下、ON-PAM テーブルの解答に対するまとめ
・アジアの特定のエリアを重視することには意味を見出しにくい
・ON-PAM は地理的にはアジア
・作品のアーカイブ化
・ネットワークの強化
・ON-PAM は有機的な運動体として形を変えながらつづけていきたい
・今回のようなサブネットワーク的ミーティングを増やしていく
・行った先でイシューを共有し、議論していく

・その議論の内容をウェブや日本でのミーティングを通じて、いかにアジアで今起きていることがおもしろいかを紹介し、シェアしていく

この後、各テーブルでの議論のまとめがそれぞれ発表された。

註 1：

事前の交渉と、光州 AAT 側の理解により韓英／韓日の同時通訳が用意されていたにもかかわらず、IETM 側の出席人数が 100 人を超えたことから会場が直前に 2 度変更され、また韓国からの参加者がほぼゼロであることがわかり、韓国語をキーとしてのリレー同時通訳の意義が低下し、前日ぎりぎりまでやりとりはしたものの、結局形式と内容については IETM 主

導となり、通訳は入らないこととなる。その結果、（英語が十分に話せない）ON-PAM のラウンドテーブルへと転じたという経緯があった。

了